広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	thetisch oder kategorisch : ドイツ語・日本語における主語の姿
Author(s)	吉田, 光演
Citation	広島ドイツ文学 , 33 : 17 - 36
Issue Date	2020-12-25
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00050149
Right	Copyright (c) by Author
Relation	

thetisch oder kategorisch

―ドイツ語・日本語における主語の姿―

吉田　光演

0.　本稿の目的[1]

本稿は，ドイツ語と日本語の主語のあり方の比較をテーマとして，スイス出身でオーストリア圏の大学で教鞭を取った言語哲学者 Anton Marty (1847-1914)が提起した thetisches Urteil (単独判断・存在承認)と kategorisches Urteil (複合判断・定言判断)の区別の意義を現代言語学の観点から問い直すことを目的とする。この区別は，判断の基礎をなす命題が主語と述語からなるという伝統的な論理学の見方，また，文には主語が存在するという伝統的な（現代の生成文法でも前提されている）言語学的な見方を覆し，主語が必要とされない文の存在と判断のありようを認めるものである。このことが，ドイツ語や日本語，その他の言語における主語不在文ないし主語存在の希薄な文の現象の説明に有益であることを示す。また，Marty (1918)がドイツ語を例に指摘した「擬似複合判断」(pseudokategorisches Urteil)の形式は，主語が統語的に明示されているものの，その実は隠れた単独判断であり，文構造と意味のズレの問題が，ドイツ語だけでなく日本語にも見られること，形式と意味のズレとその解釈の問題として重要であることを明らかにする。本稿は次の構成からなる。１節で主語と述語の概念について概観し，２節で Marty が具体的に論じた thetisches/ kategorisches Urteil の概念について説明する。３節ではこの区別を再発見した Kuroda (1972)の議論と，日本語の分析について考察し，４節では以上の議論を踏まえ，ドイツ語の場合の複合判断と単独判断の違いについて暫定的なまとめを示す。５節では，単独判断を示す文がドイツ語で統語的な主語を持つ 擬似複合判断文であるという点を分析し，６節ではドイツ語の経験者主語などの非主格主語が生じる文をどのように分析するかを論じる。７節ではドイツ語の所在文，提示文を考察し，それらが単独判断に対応することを見る。８節は本稿の結論である。結論的には，ドイツ語では日本語の「は」「が」のような（比較

---

[1] 本稿は，2020 年 3 月 21 日に広島大学で開催された第 100 回広島独文学会研究発表会において，筆者が発表した内容を加筆修正したものである。会場で寄せられた意見，及び匿名査読者の指摘に感謝する。内容上の誤謬は無論筆者の責に帰せられる。なお，本研究は JSPS 科研費 18H00664 (代表：藤縄康弘 (東京外国語大学))の助成を受けている。

的）言語的に明確な判断レベルの区別はないが，英語と比べると範疇的な主語とは言えない構文が数多くあり，kategorisch/ thetisch の区別が有意味であることを示す。

1.　主語と述語の概念

アリストテレスのオノマ (名詞的要素)とレーマ (動詞的要素)の区別以来，文は主語と述語からなり，論理学的には命題は主語と述語からなるということは自明とされてきた。例えば，次の文でそれを見よう。

1) a. Charly schläft.
   b. チャーリーは眠っている。
   c. SCHLAFEN (CHARLY)　１項述語
2) a. Ein Hund schläft.
   b. 犬が眠っている。
   c. ∃x[HUND (x) ∧ SCHLAFEN (x)]　存在命題

ドイツ語も日本語も，文は名詞を中心とする主語と動詞や述語名詞を中心とする述語に分けられる。これは他の言語についても当てはまり，通言語的な普遍的な特徴とみなされる。ドイツ語でも日本語でも 1)a, 1)b は，主語となる名詞句と述語となる動詞句の２つからなる文であり，述語論理では 1)c のように表され，主語が指示する個体を項とし，それに対する１項述語 (関数)による叙述 (述定 Prädikation)が完成し，命題が成立する。よって，発話状況に照らして命題の真偽を判断することができる。2)a, b も同様だが，2)a では主語が不定冠詞に導かれた不定名詞句であり，述語論理レベルでは特定の個体を指示せず，2)c のように，「犬という名辞に属し，かつ，眠っているような項（変項）が少なくとも一つ存在する」という個体の存在に関わる命題を表す（日本語には冠詞がなく，定・不定の区別は文脈に依存する）。意味的には，Hund は述語(個体の集合)を表すが，対象領域を限定する点で主語の役割を果たしていることは変わりない。このように，主語と述語は，文法的にも意味的にも確立された概念であると考えられてきた。

しかし，何が主語として認定できるか不明瞭で，主語が明確に見出せないような例もある。

3) a. Es regnet. (cf. *Was regnet?　*ES regnet.　WH 疑問の対象にならない。es に強勢を置けない)
   b. 雨が降っている。(何が降っているの？　→雨が降っている)
   c. あっ，φ しぐれてきた/ ふぶいてきた。（φ: ゼロ主語）

4) a. Es wurde gestern getanzt. (Gestern wurde (*es) getanzt.) (es: 虚辞。文頭の前域以外には現れない)

b. 昨日はダンスがあった。

5) a. Mir ist (*es) kalt. (#Ich bin kalt. #: 意味的に逸脱)

b. 寒い。(私は寒い)

3)a のような天候動詞の主語 es は「擬似項」(Pseudo-Argument)と呼ばれ，必須の主語であるが，指示対象・意味役割は漠然としており，regnen の主語は es 以外のものは取れない。このような擬似項やそもそも意味役割を持たない虚辞 (Expletiv)は日本語には存在しない。3)b「雨が降る」のように，具体的な「雨」が項として現れるか，または 3)c の「しぐれる」「ふぶく」のような天候動詞の場合には，主語は不要であり，ゼロ項となる。この点で，文は主語・述語からなるという一般化は日本語には当てはまらない。ドイツ語でも主語が必須ではない場合がある。4)a の非人称受動では，自動詞 tanzen の受動化によって外項の動作主は抑制されてしまい，主語位置は空になる。空の主語位置に埋められた es は穴埋めの虚辞であり，述語から意味役割が与えられず，es は文頭の主語位置（生成文法の用語では CP (Complementizer Phrase)指定部）以外では現れない。他方，日本語には意味のない虚辞はない。

また，感情・感覚・経験を表す形容詞や動詞の中には，主格主語ではなく，与格あるいは対格で経験者を表す非人称構文がある。5)a がその例であるが，他にも，Mich friert. /Mir graut/Mir ist bange. などの動詞，形容詞がある。日本語では，経験者述語では 1 人称しか現れず(人称制限)，また，経験者 1 人称与格は表さないのが普通である。主格でないのは「私には寒い」のようなニ格が現われるからである（「私が寒い」と言うと「私」は談話の焦点の解釈にしかならない）。英語では，格としての与格は中世で消失したので，経験者述語の場合でも „I am cold.“のように主格主語で現われるか，„It's cold for me/ to me.“のように擬似項としての主語 it と経験者を表す前置詞句が現れる。このような経験者は，与格・対格の形で現れるが，主語として捉えることができる。例えば，次の文を見よう。

6) a. weil meinemVater$_i$ sein$_i$ Auto gefällt (与格が主語 sein Auto を先行詞として束縛する)

b. ??weil sein$_i$ Auto meinem Vater$_i$ gefällt

c. weil [$_{IP}$ [$_{VP}$ [$_{NP}$ meinem Vater]$_i$ [$_{V'}$ [$_{NP}$ sein$_i$ Auto] gefällt]]] (=6)a)

与格経験者は，対象の意味役割を付与された主格主語 (sein Auto)よりも先行し，6)a のように，主語内の代名詞 sein の先行詞になる。6)c のように，動詞句指定部にある与格名詞句 meinem Vater が目的語位置の sein Auto よりも階層的に上にあり，sein を束縛できる。この

ことから，経験者のように語彙的な格でマークされ，主格の主題役割よりも意味役割が上位にある場合，主語の特性を持つことができると言うことができる。

これらの例から，ドイツ語，日本語では，述語が動作主や叙述の対象のような主語項を要求する場合に主語が主格で現われるが，そのような項が必要でなければ，意味の希薄な es 構文，主語が主格ではない非人称構文，ゼロ主語文が使われることがわかる。つまり，文において主格＝主語が必須であるという考え方は一般化できない。しかし，主語が顕在化しない文でも，統語的に文は成立し，意味論的には真偽が問題とされる命題が成立し，平叙文形式では判断行為が行われるのである。

英語では，電文体のような特殊なものを除いて主格主語が時制文で要求される 。これは，生成文法で言う EPP =Extended Projection Principle (拡大投射原理) に基づく （時制文では常に文 IP の指定部＝主語位置が埋められねばならない。Chomsky 1982: 10）。つまり，動詞が主語位置に対して意味役割を要求しない場合でも，it のような虚辞が必須となる（cf. „It seems that John is sick.“)。これは，主格主語と定動詞の人称.・数・時制の一致 (agreement / Kongruenz)によって要請されるものであり，一致がある言語では一般的である（イタリア語，スペイン語のような代名詞主語脱落 (pro-drop)の現象が起きる場合には，音声形のない主語代名詞 pro が存在する）。一方，ドイツ語の 4)a, 5)a のように主格主語が存在しない場合は例外的であり，EPP から逸脱していると考えられる。[2]

2. thetisches Urteil(単独判断)と kategorisches Urteil (複合判断)

このようにドイツ語， 日本語では，主語・述語は述語の項構造・意味役割・統語構造によって相対化されているが，オーストリアの Wien 大学で Brentano 学派として活躍した哲学者・心理学者 Franz Brentano(1838-1917)，そして彼の弟子であった Anton Marty は，主語・述語構造が決して普遍的なものではなく，論理的レベルの判断形式では異なる種類のものがあるということを主張した。それが thetisches / kategorisches Urteil の二分法である。次に，この区別を見ていこう。

心理主義・経験主義の立場に立つ Brentano は，ゼロ主語文(subjektloser Satz)の問題を Marty より前に論じていた。Brentano は，Es regnet./Es donnert.のような天候動詞とともに現れる無主語文(subjektloser Satz , 我々の観点からは擬似主語文）では，主語が存在しないのであるから，命題が主語と述語の結合から成り立つという判断論の前提が崩れてしまうことを指摘した (Brentano 1874/1925: 183-196)。Brentano は，命題が主語と述語からなり，よ

[2] ドイツ語の文頭の前域は，節 CP の指定部位置であり，主語が生成する位置ではない。よって非人称受動の es は虚辞であり，主語との関係はない。ドイツ語の主語位置は中域の最初の IP 指定部にあると考えられるが，そこには音形のある主語はなく，可能性としては音のない主語代名詞 pro があると考えられる（吉田 1997）。また，5)b の経験者主語 mir は文 IP の指定部の主語位置に生成され，非主格主語として認定されるか，または動詞句の指定部位置にある（その場合には文 IP 指定部には pro が生じる）。

って判断は，主語が表す範疇に対する述語による叙述(Prädikation)から成り立つという伝統的なカテゴリー主義的な論理学の見方に対して，判断は表象された対象（事象）の存在の承認(Anerkennen)または棄却(Verwerfen)に基づくと主張した。従って，主語のない文であっても判断（対象・事象の承認）は完全に成り立つ。他方，kategorischer Satz は，対象の存在が承認済みの主語とそれに対する述語による述定 (Prädikation)からなるとした(二重判断：Doppelurteil, Brentano 1874/1925: 165)。[3]

このような判断論に対する Brentano の見方を継承して，Marty (1918)は２つの判断の形式に関する考察を精力的に展開した。Marty によれば，判断を下す陳述文タイプの文では２通りの判断がなされる。一つは，話者が主語（あるいは事象）として挙げた対象を知覚し，その存在の承認または否認に関わる存在承認 thetisches Urteil （単独判断）である。これは，それ自体で叙述 (Prädikation)を行うものでなく，全体として出来事（事象 event)が起きる，対象が存在するタイプの存在文，現象文，Kuno (1973)が述べたように，焦点が文全体にかかる中立叙述文のようなタイプの文である。

7) a. Gott ist. (Marty 1918: 272)
   b. 神は存在する。（??神が存在する。）
8) a. Auf dem Tisch ist (liegt) ein Buch. (cf. #Ein Buch liegt auf dem Tisch.)
   b. テーブルの上に本がある。
9) Alle Dreiecke haben zur Winkelsumme zwei Rechte. (すべての三角形は内角の和が２直角だ) (Marty 1918: 260)

7)a は存在を表す sein が 1 項述語として使われる（他に存在を示す表現として existieren, 擬似項 es を伴う es gibt がある)。しかし，7)a の存在文では，神の存在が予め前提されていて，sein という述語 によってそれが真と判断されるのではない。むしろ，sein とともに対象となる神が知覚され，導入される。日本語では，7)b のように「神が」ではなく，「神は」の方が容認しやすい。つまり，7)b は複合判断の形式ということになる (Kuroda 1972: 181)。このズレについては後に触れる。8)a では，場所を表す前置詞句の後に不定名詞句主語があるが，この主語は，話者によって対象である ein Buch として初めて存在が認知される（提示文）。主語 ein Buch が文頭にあると ein Buch が焦点化されてしまい，文としては落ち着かず，容認しにくい（辞書や雑誌ではなく本が一冊あるという排他的主張なら容認可能）。このように，主語の存在が知覚され，全体として事象 (Ereignis, event)を表す文を

[3] Brentano (1874/1925: 56)は，すべての複合判断文(kategorischer Satz)は意味を変えることなく存在文(単独判断文・承認文）に変換することができると主張する(„Irgendein Mensch ist krank.“は„Es gibt einen kranken Menschen.“に変換できる）。つまり複合判断は単独判断に還元できると考えている。

Marty は thetisches Urteil（単独判断・存在承認文）と呼んだ。これは一見すると，情報構造における定・不定（既知・未知）の区別に還元できるようにも思われる。しかし，主語が不定名詞句である場合だけでなく，定の場合も単独判断でありうる。Marty は 9)のような定理を表す全称命題も単独判断であると考える(Marty 1918: 260f.)。9)では，alle Dreiecke は総称的な概念であり，「三角形」のすべての実在が前提されたものではないとする（談話場面で三角形がなくても 9)の判断は成立する）。パラフレーズすると，「内角和が 2 直角でない三角形は存在しない」という二重の否定存在となる。cf. Fujinawa 2017: 22）。alle や jeder は妥当する集合のメンバー全体に対して作用するという意味で強い量化子であり，この意味では定の表現であると言える。しかし，Marty によれば，判断のレベルでは単独判断ということになる。ここには論理的・意味的なレベルでの主語の妥当性と，統語的・語用論的レベルでの主語の性格の観点のズレがあると言える。

このように，出来事を全体として提示し，主語の存在が話者によって承認（あるいは否認）される文が単独判断であり，対象に対する叙述はまだ完成していない，むしろ叙述は成立していない。主語である対象が前提され，それに対する叙述(述定)がなされる文が複合判断 (kategorisches Urteil)である。Marty (1918)では，人称代名詞や指示代名詞を用いた直示表現や，固有名詞などによって，発話場面において対象(表象)の存在が明確なものが複合判断の主語の典型例として挙げられている。

10) a. Diese Blume ist blau. (Marty 1918: 227)
b. Mein Bruder ist abgereist. (ebd.)
c. Einige Bäume deines Gartens haben vom Frost gelitten. (ebd.)
d. Prag ist eine Stadt an der Moldau. (Marty 1918: 229)

10)c には einige という不定を表す代名詞があるが，deines Gartens という代名詞を含む限定句によって限定されているため，定の解釈となり，特定の木についての叙述がなされる [4]（„Einige Vereinsmitglieder sind erkrankt.“ (Marty 1918: 229f.)では定・不定の両方の解釈が可能であり，単独・複合判断両方の読みができる）。

このように Marty によれば，命題を表す平叙文の内部構造は２つの段階に分けられる。

11) Das Doppelurteil enthält, wie wir sahen, zwei Bestandteile, welche eine ganz ungleiche Stellung im Gedanken einnehmen: die einfache Anerkennung und das darauf gebaute Zu- und Anerkennen.

[4] しかし，deines Gartens によって領域が限定されたとしても，einige Bäume の指示対象が確定されていない場合も考えられる。庭の樹木の数が多くてどの木かは分からないが，霜で凍てついた木がいくつかあると知覚された場合には不定の解釈となり，単独判断と解釈されるだろう。

Entsprechend sind denn auch im kategorischen Satz zwei Elemente mit eigentümlich verschiedener Syntaxe gegeben, derart, daß ihre Position nicht ohne Aenderung (*sic!*) des Sinnes vertauscht werden kann: nämlich ein Subjekt und ein Prädikat, d.h. etwas, was ausgesagt wird. Das Subjekt führt ganz passend diesen Namen. Ist doch jenes Anerkennen, dessen Ausdruck es bildet, die Basis oder das Fundament für den akzessorischen Teil des eigentümlich zusammengesetzten Gedankens. (Marty 1918: 247f.)

11)で述べているように，判断における思考対象の承認 (Anerkennung)と，それに対する叙述があり，これが主語と述語という別々のものによって表されるのである。

Brentano—Marty は，判断論・論理学的な認知レベルにおいて，主語と述語からなる命題という伝統的な見方を批判した。それは，とりわけ Brentano による経験主義的・心理主義的な立場に基づいて，「表象＝概念＝カテゴリー」という観念的な見方による等式に対する批判となった。判断を下すのは表象を知覚・認知する志向性を持った話者であり，それを承認する心的行為があって初めて成り立つ。この意味では表象・対象の実在的な立場とは異なり，フッサールに通じる現象学的な立場である。それがむしろ否定的に影響したためか，フッサール，ハイデガーの影響に隠れて Brentano—Marty の言語哲学をめぐる議論は長らく忘却されてしまった。この点に関しては，Brentano と Marty よりもやや先立つ世代である Gottlob Frege の論理学的な概念記法(Begriffsschrift: 1879)による命題主義への批判も，視点はまったく異なるが，似たような問題意識を持っていたと言えよう。Frege は，命題において主語と述語の区別は意味をなさない，むしろ命題自体が真偽（判断）を表すのではなく，話者が命題に対する判断を「判断線(Urteilsstrich)」によって付け加えると主張する（Frege 1879)。例えば，1)a は，最初に ─SCHLAFEN(CHARLY)と書かれるが，その段階では真偽が定まらない思考(Gedanke)でしかなく，「真である」という断定の判断線 | が加わって，├─SCHLAFEN(CHARLY) という形で初めて判断が成立する。このように，Frege の場合は主張＝真の判断という方向であり，心理主義に対抗する実在主義的な立場であったが，主語と述語からなる命題という伝統的見方に対する批判を行っていたことは興味深い。歴史的に見れば，ラッセル，ヴィットゲンシュタインらによる Frege の評価によって，Frege の判断論は論理学的に高く評価されたが，当初は Frege の論考は哲学的にも評価されていなかったのである[5]。

[5] Marty (1918: 56ff.)でも，Frege (1879)の概念記法に関する記述がある。Marty は，Gedanke, Urteil に関する Frege の考察について問題点を挙げつつも，従来の Urteil の見方に対する批判においては賛同している。

3. Kuroda (1972)による日本語の分析

Marty が論じた単独判断と複合判断の区別は，長い間顧みられることはなかったが，Kuroda (1972)によって再発見され，日本語の「は」と「が」の区別に応用され，それによって言語学者から注目されるようになった。Kuroda (1972)は，日本語では「が」と「は」の用法の違いによって，単独判断と，叙述が完成する複合判断(kategorisches Urteil)が表されることを初めて明らかにした。

12) a. 猫があそこで眠っている。thetic
　　b. 猫はあそこで眠っている。categorical

12)a では主格の「が」が使われているが，話者は猫（ある猫または特定の猫）が眠っている状況を実際に目で見て知覚し，その状況を全体として聞き手に伝えているだけであり，ここではまだ対象である猫についての叙述はなされていない（12)a の否定は「あそこで眠っている猫はいない」）。つまり 12)a は，「何が起きたの？」に対する答えである。一方，12)b では話題の「は」が現れ，特定の猫に話者が注目し，その存在を認めた上で，その猫について「眠っている」という叙述を行い，判断を下しているのである（12)a の状況の知覚を前提した上で，更に知覚された猫についての叙述を追加する）(Kuroda 1990: 81)。「猫はどうしたの？」への答えであり，対象存在の承認と対象の叙述という二重の判断がなされる。つまり，日本語では「が」と「は」は通常の見方ではどちらも主語を表しうるが，この２つの区別によって統語的に単独判断と複合判断が表されるのである 。Marty の立場に立つ Kuroda の見方によれば，「は」で表される主語は複合判断の主語として認定されるが，「が」が用いられる文は単独判断であり，主語の概念としては認められないことになる。つまり，二つの判断の区別が日本語において明確に表されているのである (cf. 井川 2012: 56-58.)。

12)a, b の区別は，ドイツ語や英語，フランス語などの欧米系言語では形態的に明確にはマークされないが，不定冠詞と定冠詞，文アクセント(強勢)によって表すことは可能である。特に語順が比較的緩やかな定動詞第２位語順のドイツ語では，語順によって主語の特性が変化し，単独判断は不定冠詞，複合判断は定冠詞によって表される(13)a,b)。また，前者では主語は後置され，後者では前置される傾向がある。強勢は単独判断では主語に，複合判断では述語，または主語・述語両方に置かれる。

13) a. Es laufen Kühe im Garten herum. (Abraham 2018 :78 ）thetisch
　　b. Die Kühe im Garten dürfen da nicht sein. (Abraham 2018: 79)　kategorisch

「〜が起きる」タイプの現象文は単独判断であるが，文頭の主語に強勢が置かれる (14a)。また，同じ定名詞句であっても，焦点の置き方にも関連する。14)b では述語に強勢が置かれ，複合判断となる (Sasse 1987)。

14) a. Der PAPST ist gestorben. (Abraham 2017) thetisch （太字は強勢）
b. Der Papst ist GESTORBEN. (Abraham 2017) kategorisch

これは一見すると，テーマ・レーマ構造などの情報構造と似ている。Lambrecht (1994)は，thetisch/ kategorisch の区別を情報構造の面から把握した。主題 (話題)が現れない提示文 (What's the matter?と問える文）は thetisch な文に対応し，レーマがテーマに先立つ。主題 (話題)が現れる文は kategorisch な文に対応し，テーマが先立つ（14)b では，「法王はどうした？」が問われる）。よって，情報構造との違いはないと主張する。しかし，既に見たように，単独判断と複合判断の区別は情報構造と同一視することはできない。

15) a. 鯨は哺乳動物だ。 [thetisch] テーマ（話題）
b. 鯨が哺乳動物だ。 [thetisch] レーマ（総記）
c. (この中で）哺乳動物であるのは鯨だ。[kategorisch]

15)の述語名詞は属性を表し，具体的対象を叙述するのではなく，概念について伝えるだけであり，15)a, b は存在承認文である。15)a は談話の出発点となる話題(テーマ)があり，話題＋叙述の構造である（「鯨は哺乳動物なの？」）。15)a は総称文であり，特定の鯨ではなく，鯨一般について問題にしているが，鯨の概念が発話場面で前提されているわけではない。15)b では「鯨」が焦点解釈を受ける（「何が哺乳動物なの？」状態述語で「が」(総記の「が」)が使われると焦点解釈になる。Kuno 1973）。更に，Deguchi (2012)が指摘したように，総記の「が」で表された文は，15)c のように逆転させると，「は」によってパラフレーズできるので，Deguchi の解釈では複合判断になる。また，Deguchi (2012) によれば，16)a は単独判断の「が」で問題ないが，それを「は」で置き換えた 16)b は対比的・対照的文脈であり，15)c と同様に，述語に対してではなく，対比の「雨は」に対する叙述になっている。

16) a. 雨が降っている。 [thetisch]
b. 雨は降っている（が，すぐやみそうだ）。[kontrastiv/ thetisch]

Marty の thetisch/ kategorisch の判断論に基づく Kuroda (1972)の「は」「が」の分析によって，日本語の特徴が明らかになり，thetisch/kategorisch の言語学的研究が進んだが，Kuroda

(1972) の見通しに反して，日本語の「は」「が」は kategorisch / thetisch の区別と完全には一致しないことも明らかになった。言い換えれば，判断という意味論的レベルでの問題と言語表現における「内的／外的形式(innere / äußere Form)」としての主語の現れにおける問題は同一レベルではなく，切り離して考えねばならないのである。

4. ドイツ語の thetische /kategorische Sätze －暫定的なまとめ－

thetisch/kategorisch に関して，ドイツ語では，日本語ほど形態論的な明確なマーキングによる区別はない。しかし，この区別は，ドイツ語の文の統語論的・意味論的な分析に際して，以下のような有効な方法論を提供すると言える。ここで，これまでの議論を暫定的にまとめる。

I. 文の主語性 (Subjekhaftigkeit)について

主語とは何かについては，文法的主語，論理的主語，心理的主語，叙述の対象，主格主語等，様々な定義があり，立場によって，あるいは見方によって混乱しがちであった。これに対する決定的答えはないが，Marty の主張によれば，命題の判断において叙述(述定)の主語になるのは，kategorisch な複合判断文において叙述＝判断の対象として承認された対象だけである。一方，thetisch な存在承認文における主語は，存在命題における述語と同じ性質を持ち，Marty によれば主語の性格を持ってはいない。次の 17)b の„Ein HUND schläft.“における ein Hund がこれにあたり，意味論的分析と判断レベルの分析が一致する。17)b の ein Hund は統語論的には主格主語として現れるが，Marty の分析ではこれは「擬似複合判断」(Pseudokategorisches Urteil)における主語であり，真の主語の地位を持っていない。この区別は意味論的な区別であるが，経験者与格などの問題を考えるときにも有効である („Mir ist kalt.“ の mir は主語と言えるかどうか？)。実は，この擬似複合判断の形式の文が論理的な意味と統語的形式のズレを説明するために有用なものと考えられる。これについては後で触れる。

17) a. Unser Hund <u>schläft</u>. kategorisch (主語の前提)
b. Ein <u>HUND</u> schläft. thetisch (主語ではなく，述語的)

II. kategorisch な複合判断の主語は節 CP の指定部または文 IP の指定部位置にある。一方，thetisch な単独判断の主語は文 IP 指定部または動詞句 VP の指定部にある。

単独判断の主語は，動詞選択，語順，意味解釈の区別に依存する(動詞句内で主語を取る非対格動詞 など)。ただし，虚辞の es は CP 指定部に生じ，thetisch な単独判断の形式的な主語になる（判断論のレベルでの主語ではない）。つまり，ドイツ語では主語は CP 指定

部，IP 指定部，VP 指定部に生じる。この意味でドイツ語は，英語とは異なって主語位置（thetisch な文の主語）の変異が豊かであると言える。

18) a. [$_{CP\ Spec}$ NP C [$_{IP}$ spec ….. 文 [$_{VP}$]]] kategorisch

[$_{CP\ Spec}$ Gregors Blick [$_{C'}$[$_{C}$ richtete] sich dann zum Fenster.]] kategorisch (Kafka, *Die Verwandlung*)

[$_{CP\ Spec}$ Es [[$_{C'}$[$_{C}$ war] an einem Sonntagvormittag im schönsten Frühjahr.]] thetisch (Kafka, *Das Urteil*)

b. [$_{CP\ Spec}$ XP] C [$_{IP\ Spec}$ NP 文 [$_{VP}$]]] kategorisch/ thetisch

Topics/Expletiv/Adverb 主語

c. [$_{CP\ Spec}$ Nun [$_{C}$ hatte] [$_{IP}$ aber Georg seit jener Zeit, so wie alles andere, auch sein Geschäft mit größerer Entschlossenheit angepackt.]] kategorisch (Kafka, *Das Urteil*)

d. [$_{CP\ Spec}$ Da [$_{C'}$ [$_{C}$ sind] [$_{IP}$ KÜHE im Garten.]]] thetisch (Abraham 2020: 105)

e. [$_{CP}$ C [$_{IP\ Spec}$ ….. 文 [$_{VP}$ NP]]] thetisch

f. [$_{CP\ Spec}$ Es [$_{C'}$ [$_{C}$ sind] [$_{IP}$ [$_{VP}$ viele Soldaten umgekommen.]]] thetisch (unakkusativ) (Abraham 2020: 105)

III. 弱い定名詞句と強い定名詞句の区別による意味解釈の違い (Milsark 1974)

既に見たように，einige (some)のような限定詞は文脈によって，強い限定詞としての特定的な解釈を持つことも，弱い限定詞としての不定（存在）の解釈を持つこともできる。このような限定詞句が主語位置に現れた場合，強い限定詞句は kategorisch，弱い限定詞句は thetisch の解釈となる。この場合，19)(ii)のように節 CP 指定部に主語がある場合でも，元位置の下位の IP 指定部 (t_i)において解釈される。

19) Einige Ziege des Kaufmannes weidete auf der Wiese. (Scheibl 2004: 133)

(i) 特定の山羊。他の山羊は納屋にいる (strong: kategorisch)

[$_{CPSpec}$ Einige Ziege des Kaufmannes [$_{C'}$ weidete auf der Wiese.]]

(ii) たまたま草を食べている山羊が何匹か存在する (weak: thetisch)

[$_{CPSpec}$ Einige Ziege des Kaufmannes$_i$ [$_{C}$ weidete [$_{IP}$ t_i auf der Wiese.]]

IV. 情報構造との相互作用（テーマ・レーマ構造）

Kuroda (1972)が指摘した「は」＝複合判断，「が」＝単独判断の対応関係は，Kuno (1973)の中立叙述の「が」と総記の「が」の違いが介在すると，必ずしも単純に成立しないことは既に見た。しかし，Kuno の総記の「が」の解釈も当てはまらない場合があることが国語学の分野から指摘されている。

20) a. ねえ，地球は青いね。（宇宙船から地球を見たとき）（丹羽 1988: 35）（複合判断）

b. ねえ，地球が青いね。（単独判断）

20)a,b どちらも，同じ状態動詞「青い」が用いられているが，20)b では「地球が青い」ことを改めて発話場面の眼前で確認した事象文である。Kuno (1973)の説明では 20)b では，「が」名詞句は総記解釈（レーマ）になるはずであるが，事態を知覚する中立叙述の意味となり，単独判断と解釈できる。また，Kratzer (1995)の個体レベル述語（時空間にとらわれない属性を表す状態述語 ）と時間空間的な（個体の存在を表す）局面を表すステージレベル述語の語彙意味論的な区別を用いても，「青い」というまったく同じ形容詞が使われているので，語彙意味論的に区別することは困難である。

V. 談話場面における直示 (Deixis)との関連 (ich, hier, jetzt, dieser etc.)

21) a. Dies ist rot. (Marty 1918: 227) kategorisch

b. Diese Blume ist rot. (ebd.) kategorisch

c. Mein Bruder ist abgereist. (ebd.) kategorisch[6]

dies, diese Blume と言うことによって，既に話者の発話場面に連結しており，対象の存在は明確に前提される。mein Bruder も同様で，1 人称所有冠詞によって話者との関係が明確化されている。

5. 擬似複合判断文の問題

主語−述語の形の命題に対応する文構造が基本的なものであるということは，Marty の kategorisch/ thetisch の区別によって突き崩された。しかし，文形式の主語の問題に立ち戻ると，単独判断形式の文でも主語自体は現れる。Marty はそれを擬似複合判断文 (pseudo-kategorische Aussage)と呼んだ(Marty 1918: 260)。

[6] 匿名査読者から，„Was ist los? Du sieht so traurig aus.“ − „Mein Bruder ist abgereist. Ich fühle mich einsam. “のような状況がある場合， 21)c が thetisch に解釈されるのではないかという指摘があった。21)の例と判断は Marty (1918)によるもので，明らかに主語対象の存在が前提され，文脈的に確定されたものとして設定されている。しかし，mein Bruder の例の場合は既知要素であるが，直示要素ではない。mein Bruder への言及が談話状況ではなされておらず，白紙の文脈で全体として事象認知の一部として提示された場合には，査読者の指摘するように，21)c は thetisch な把握も可能だろう（突然兄が出立してしまった）。ただし，その場合は，主語 mein BRUDER に強勢が置かれる。

22) Der Anlaß dazu ist, daß es eine Fülle pseudokategorischer Aussagen gibt, indem auch für einfache Urteile der übliche Ausdruck oft die innere und äußere Form kategorischer Sätze aufweist. (Marty 1918: 260)

その典型は既に挙げた必然的真を表す定理（„Alle Dreiecke haben zur Winkelsumme zwei Rechte.“)であるとしている。なぜなら，主語 alle Dreiecke は言語的に表現されてはいるが，主語の三角形の存在はなんら主張されていない単独判断だからである（内角和が２直角ではない三角形は存在しない）。Marty は他にも，次のような否定辞のある例を挙げている。

23) Kein Pferd ist geflügelt. (Marty 1918: 264)

23)の「翼のある馬はいない」の主語 kein Pferd は存在が否定されており，単独判断である（=„Es gibt kein geflügeltes Pferd.“)。否定を含む文の主語は複合判断の外的形式を取るが，実際には(内的形式は)単独判断である。既に見たように，einige などの限定詞も同様である。

これまで分析してきたように，天候動詞の es などの擬似項を含めて主語位置を統語的に埋める必要のあるドイツ語の文はすべて，判断レベルでは単独判断であっても，統語構造(外的形式)においては擬似複合判断であると分析することができる。

24) a. Gestern hat <u>es</u> geregnet. (擬似項 es : 単独判断）
b. Es zieht. (擬似項 es : 単独判断 「隙間風が入る」）
c. Es gibt einen Weg. (擬似項 es : 単独判断）
d. Es handelt sich um ein Missverstandnis. (擬似項 es : 単独判断）

25) a. Ein HAUS brennt. (不定名詞句主語，単独判断）
b. KÜHE laufen im Garten herum. (不定複数名詞句主語，単独判断，表明, Abraham 2020: 94)

26) a. Das TELEPHON klingelt. (定名詞句主語，主語強勢，単独判断「電話が鳴った」）
b. Die POLIZEI kommt. (定名詞句主語，主語強勢，単独判断）
c. Sagt (aber) der Igel zum Hasen. (定動詞第１位，定名詞句主語，単独判断，物語文，Abraham 2020: 91）

27) a. Es traten zwei Personen in den Laden. /Zwei Personen traten in den Laden. (虚辞，純粋な単独判断, DUDEN 2006: 823)
b. Es erschienen nur etwa dreißig Zuschauer./Nur etwa dreißig Zuschauer erschienen. . (虚辞,

純粋な単独判断, ebd.)

c. Es spielt (erfreulicherweise) Erwin Lehn die ganze Nacht hindurch. (虚辞，純粋な単独判断，Abraham 2020: 97)

d. Es wurde gestern getantzt. (虚辞，純粋な単独判断）

27)a,b,c,d のような文頭(前域)の虚辞 es が現れる文における中域の主語は完全な単独判断である。それらは「現れる」「生じる」タイプの現象文，非人称構文である。それ以外の 24)a,b,c,d は擬似項の es が主語として形式的に現れるケースであり，意味的には主語は存在しない。Marty はこのような擬似項主語の場合も，無主語構文としての単独判断であると分析しているが，統語論的な分析によれば，これらは，動詞によって統語論的な主語が必要とされている擬似複合判断形式の文であると言える。25)a の不定名詞句主語，25)b の不定複数名詞句主語の場合，Marty の意味で対象の存在・出現の認知が問題となっており，単独判断であることは確かであるが，定動詞と人称変化において一致が成立する統語論的な主語と確認できるので，擬似複合判断の形式である。また，26)a,b の定名詞句主語の場合，指示対象は定(一般知識の中に蓄積された対象物）であるが，知覚レベルでは前提されていない単独判断である。しかし，統語論的には明確な主語であり，擬似複合判断形式である。26)c の定動詞第 1 位文(V1)では意味論的に新情報を表す主語であり，イタリア語，スペイン語などの他の言語でも，単独判断を表す形式である主語−動詞倒置文としてよく用いられている。

このように見た場合，意味論的には単独判断として実際の眼前の状況を知覚して事象の存在を表しているが，統語形式としては，文(IP)の指定部として屈折形の一致のために主語が必要となるものが擬似複合判断文の形式であり，屈折変化を要求し，EPP（拡大投射原理)に従うゲルマン系言語，ロマンス系言語では頻繁に現れ，意味的な判断形式と文形式のズレが生じる典型であると言える。

6. 斜格（非主格）主語のステータス

もう一つ，英語にはないタイプの斜格主語が現れる文について再度検討する。

28) a. Es ist mir kalt./ Mir ist kalt. (与格)

b. Es friert mich. /Mich friert. (対格)

c. Es hungert mich./Mich hungert. (対格)

d. Mir gefällt dieses Hotel. (与格)

e. Es gefällt mir in Hamburg. /Mir gefällt es in Hamburg. (与格)

28)a～e に現れる与格 mir, 対格 mich は感覚・知覚の所有者を表す経験者を意味し，28)a,b では文頭の es は明確な虚辞であり，項は経験者与格しかない。例えば，28)a では「私は寒い」という意味であり，経験者である話者の感覚状態について言及したものであって，「私が寒い」といった焦点の解釈はない。他の例もそうである。gefallen の場合には，対象（主題）を表す主格と与格経験者の２つの項が現れるが，束縛現象でも与格の方が主格主語より上位にあり，また，語順でも与格の方が主格より前に現れる。この場合も経験者は話者として発話場面で直示的に前提されており，主格位置にはないが，複合判断の主語として，知覚対象として承認済みであり，叙述の対象＝主語となっていると考えられる。28)d を除いて非人称構文であるが，28)d も経験者を文構造上の主語として取る複合判断であり，形式と意味のズレが現れるケースである（屈折変化レベルでは主格の主題が表見上の主語として現れているが）。統語構造としては次のように表されるであろう。

29) a. $[_{CP\ Spec}$ es $[_{C'}$ ist $[_{IP}$ mir $[_{VP}$ kalt (sein)]]]
    b. $[_{CP\ Spec}$ mir$_i$ $[_{C'}$ ist $[_{IP}$ t$_i$ $[_{VP}$ kalt (sein)]]]
30) a. $[_{CP\ Spec}$ mir$_i$ $[_{C'}$ gefällt$_j$ $[_{IP\ Spec}$ t$_i$ $[_{VP}$ dieses Hotel t$_j$]]]
    b. $[_{CP\ Spec}$ $[_{C'}$ weil $[_{IP\ Spec}$ mir $[_{VP}$ dieses Hotel gefällt$_j$]]]]

経験者与格は文 IP 指定部に生成され，文頭の前域には虚辞 es が挿入される。または，経験者が前域に移動することもできる。このようなタイプの文は，文構造の主語が必ず主格でマークされる英語には見られないものである。

7. 所在文・提示文

最後に，主格主語が現れるが，場所句が前置される所在文，提示文について考察する。

31) a. Auf dem Tisch liegt ein Buch. /#Ein Buch liegt auf dem Tisch. (場所－主語)
    b. Es lagen Bücher ^{0K}auf dem Tisch/*dort/*hier. (主語－場所)（Abraham 2020: 124)
    c. There is a book on the desk. (英語，主語－場所)
    d. Da sind KÜHE im Garten. (lokational/existentiell, Abraham 2020: 105)
    e. Es sind die KÜHE im Garten. (kategorisch, Abraham 2020: 205)

対象の所在を表すには英語では典型的に there 構文が使われるが，31)c のよう虚辞 there－主語－場所の順になる。一方，ドイツ語では場所における対象の所在を表す文は es gibt 存在文ではなく，31)a のように，場所－対象の順序が普通である。虚辞 es を用いて 31)b のように，主語－場所の順で表すことも可能だが，場所句に dort/hier のような話者の発話場面に関わる直示表現が現れると容認できない。これは，新情報－旧情報の順序が許され

ないという情報構造上の問題である。また，31)e のように対象の主語が定で指示が特定的になる場合には，虚辞があっても複合判断となる。31)a, 31)c の文は，話者・聞き手の共通知識がない状況で，対象の所在，場所における対象の提示を表す文であり，「何が起きたの？」という中立的な背景情報のもとで発話されるタイプであり，その意味で事象の存在を承認する単独判断文であると言える。対象・場所が関連する所在文はドイツ語では，英語の there 構文とは違って語順，定・不定，アクセントによって thetisch /kategorisch の解釈が変わるものと分析できる。

8. 結語 —今後の展望—

本稿では，Marty (1918)の２つの判断の区別の議論に基づき，日本語・ドイツ語を中心に主語のあり方（統語構造上の主語，述語論理の意味での主語項，認知レベルの判断における主語）について検討した。これらのレベルの主語は多層的意味で用いられており，それぞれの区別が必要であることを確認した。

Ladusaw (1994: 223)は thetic /categorical judgment の違いを次のようにまとめている。

32) The basis for a thetic judgment is a presentation of an object: an entity or eventuality. An affirmation of such a presentation commits the judger to the existence of something which satisfies the presentation; a denial by contrast expresses a negative existence judgment.

33) The basis for a categorical judgment is compound: first a presentation which is clarified into a particular object satisfying the description, and then a property to be affirmed or denied of the object.

ここでは「主語」への言及はないが，単独判断の基礎は entity/ eventuality (個体，事象）の提示にあり，主語は前提されない。複合判断では記述を満たす対象(主語)の提示とそれに帰属させる属性記述(叙述)がなされる。この考えに従えば，２つのタイプの論理表示は次のように記述できるだろう 。

34) a. [$_{CPSpec}$ Ein HAUS [$_{C'}$ brennt.]]　単独判断

b. ∃e[BRENNEN _eines_HAUSES (e)]

(ある家が燃えているという事象 e の存在が承認される）

35) a. [$_{CPSpec}$ Dieses Haus [$_{C'}$ ist alt.]]　複合判断

b. ι x[Haus (x) ∧ ALT (x)]

(話者の近領域にある特定の家 x について「古い」という属性が付与される）

単独判断では，事象(event)項である e が存在するが，主語は論理的には表示されない（∃x[Haus(x)を内部に組み込み，∃e [BRENNEN (e) (∧ ∃x[HAUS (x, e))]と記述することは可能である）。他方，複合判断では，個体を指示する ι（イオタ）演算子に束縛された家（つまり特定の個体）について，それが主語と認定され，それが古いという叙述を受ける（単独判断との並行性を考えて存在量化∃x[HAUS(x) ∧ |x|= 1]としても良い（|x|=1 はただ一つの個体 x を表す）。この論理表示は，Higginbotham (1983) の event 意味論に基づくものであるが，今後更なる精緻化が必要となるであろう。

擬似複合判断の問題はとりわけ重要である。Kuroda が Marty を批判した全称命題の取り扱い(alle, einige, jeder などの量化子を含む句のステータス，主語性）については再検討の余地がある。また，存在を表す sein などの単独判断で，„Gott ist.“ /„Es gibt Gott.“ (神は存在する）のように，「が」ではなく「は」が使われるのはなぜかという言語間の相違についても更に検討していく必要がある。いずれにせよ，thetisch/ kategorisch の区別は言語哲学上のみならず，言語理論的にも大きな課題を突きつけているのである。

参考文献

Abraham, W. (2018): Valenzdiversifikationen: Was ist Thetikvalenz? *Studia Germanica Gedanensia* 39, 69-90.

Abraham, W. (2020): Zur Architektur von Informationsautonomie: Thetik und Kategorik. Wie sind sie linguistisch zu verorten und zu unterscheiden? In: Abraham, W./ Leiss, E. / Tanaka, S. (Hrsg.): *Zur Architektur von Thetik und Kategorik. Deutsch, Japanisch, Chinesisch und Norwegisch.* Tübingen: Staufenburg, 87-148.

Abraham, W. / Leiss, E. / Fujinawa, Y.(ed.) (2020): *Thetics and Categoricals*. Amsterdam / Philadelphia: John Benjamins.

Brentano, F. (1874/1924): *Psychologie vom empirischen Standpunkt.* zwei Bände. Leipzig: Duncker / Humblot.

Chomsky, N. (1982) : *Some Concepts and Consequences of the Theory of Government and Binding*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

Deguchi, M. (2012): Revisiting the Thetic/Categorical Distinction in Japanese. *Poznan Studies in Contemporary Linguistics* 48, 223-237.

Dudenredaktion (2006): *Duden. die Grammatik.* Berlin: Dudenverlag.

Frege, G. (1879/1988): *Begriffsschrift und andere Aufsätze*. Hildesheim/Zürich/New York: Georg Olms.

Fujinawa, Y. (2017): Licht und Schatten der kategorischen/thetischen Aussage: Kopula und Lokalisierungsverben im deutsch-japanischen Vergleich. In: E. Leiss, S. Tanaka, W. Abraham / Y. Fujinawa (Hrsg.) *Grammatische Funktionen aus Sicht der japanischen und deutschen Grammatik, Linguistische Berichte, Sonderheft* 24. Hamburg: Buske: 15-40.

Fujinawa, Y. (2020): Kategorik und Thetik als Basis für Sprachvergleiche -dargestellt am Beispiel einer kontrastiven Linguistik des Deutschen und des Japanischen. In: Abraham, W./ Leiss, E. / Tanaka, S. (Hrsg.): *Zur Architektur von Thetik und Kategorik. Deutsch, Japanisch, Chinesisch und Norwegisch. Tübingen*: Staufenburg: 169-242.

Higginbotham, J. (1983): The logic of perceptual reports: An extensional alternative to situation semantics. *The Journal of Philosophy* 80 (2): 100-127.

井川壽子 (2012): 『イベント意味論と日英語の構文』 東京: くろしお出版.

Kratzer, A. (1995): Stage-Level and individual level predicates. Carlson, G.N. / Pelletier. F.J. (ed.), *The generic book*, Chicago: University of Chicago Press, 125-175.

Kuno, S. (1973): *The structure of the Japanese language*. Cambridge, MA.: MIT Press.

Kuroda, S.Y. (1972): The categorical and thetic judgment. Evidence from Japanese Syntax. *Foundation of Language* 9: 153-185.

Kuroda, S.Y. (1977): The categorical and thetic judgment reconsidered. K. Mulligan, (ed.): *Mind, Meaning and metaphysics: The philosophy and theory of language of Anton Marty.* Dordrecht: Kluwer. 77-88.

Ladusaw , W.A. (1994): Thetic and Categorical, Stage and Individual, Weak and Strong. *Proceedings from Semantics and Linguistic Theory* IV, 220-229.

Lambrecht, K.(1994): Sentence focus, information structure, and the thetic-categorical distinction. *Proceedings of the Thirteenth Annual Meeting of the Berkeley Linguistics Society,* Berkeley, California, 366-382.

Marty, A. (1918): *Gesammelte Schriften*, Vol. II/1, *Schriften zur deskriptiven Psychologie und Sprachphilosophie*, (Hg.) Eisenmeier, J., et al., Halle A. S.: Max Niemeyer.

Milsark, G. (1974): *Existential sentences in English*. New York: Garland.

丹羽哲也 (1988): 有題文と無題文. 現象（描写）文．助詞「が」の問題（下）『国語国文』 57(7):29-49.

Sasse, H.-J. (1987): The thetic/categorical distinction revisited. *Linguistics* 25: 511-580.

Scheibl, G. (2004): *Zwei Senatoren bestechen drei Vestalinnen. Nominalphrasen mit Numeralien (NumNP) und die referenziell-strukturelle Ambiguität im Deutschen*. Dissertation. Universität Szeged (Ungarn).

吉田光演 (1997): ドイツ語の虚辞 es の統語論　『言語文化研究』23．73-91.

Thetisch oder kategorisch.
Über den Status des Subjekts im Deutschen und Japanischen

Mitsunobu YOSHIDA

In diesem Aufsatz wird anhand der zwei Begriffe der Thetik und der Kategorik der Status des Subjekts im Deutschen und im Japanischen untersucht. Beide Begriffe wurden im 19. Jahrhundert von den Philosophen Franz Brentano und Anton Marty vorgeschlagen, um mit ihrer Hilfe die subjektlose (thetische) Aussage von der kategorischen Aussage mit Subjekt zu unterscheiden. Brentano und Marty kritisierten die traditionelle Auffassung des Urteils, wonach der Satz aus Subjekt und Prädikat besteht und die daraus gebildete Proposition als wahr oder falsch beurteilt wird. Sie behaupteten im Gegensatz dazu, dass es thetische und kategorische Urteile gibt, wobei im Falle der thetischen Urteile nur das Vorhandensein eines Ereignisses wahrgenommen werde, ohne dass ein Subjekt anzunehmen sei. Ein kategorisches Urteil (Doppelurteil) wird dagegen erst auf der Basis eines thetischen Urteils mit einer Prädikation gebildet. Dieser Ansatz von Brentano und Marty wurde von anderen Philosophen und Linguisten lange außer Acht gelassen. Doch 1972 entdeckte Shige-Yuki Kuroda, ein japanischer Linguist, die Nützlichkeit dieser Begriffe wieder und wandte die Differenzierung der Urteile auf *ga*- und *wa*-Subjekte im Japanischen an. Nach Kuroda (1972) entspricht ein Satz mit der *NP-ga* einem thetischen Urteil, in dem ein Sachverhalt dargestellt wird, ohne dass ein Subjekt vorliegt, wie z. B. in „*Neko-ga nemutte-iru.*“ (*Eine Katze schläft.*) Dagegen gilt ein Satz mit der *NP-wa* als kategorisch, da die *NP-wa* mit einer vom Sprecher erkannten Entität identifiziert, und somit als Subjekt etabliert wird wie in „*Neko-wa nemutte-iru.*“ (*Die Katze schläft.*) Auf diese Weise konnte Kuroda zeigen, dass die Unterscheidung durchaus sinnvoll ist, aber er stimmte in einem Punkt nicht mit Marty überein: Eine universalquantifizierte Aussage wie „*Alle Dreiecke haben zur Winkelsumme zwei Rechte*.“ wäre nach Marty thetisch, weil kein Vorhandensein des Subjekts vorausgesetzt ist. Für Kuroda ist sie jedoch kategorisch, weil das Subjekt mit *wa* markiert und deshalb präsupponiert wird. In dem vorliegenden Aufsatz wird die *pseudokategorische* Aussage, in der zwar ein syntaktisches Subjekt vorliegt, die jedoch semantisch als thetisch zu interpretieren ist, wie „*Es regnet.*“ (Marty 1918), noch einmal überprüft und klar gemacht, dass sich je nach der referentiellen Eigenschaft des Subjekts thetische und kategorische Aussagen herausbilden: Wenn die quantifizierte Domäne kontextuell spezifiziert ist, gilt der Satz als kategorisch, wie z. B. „*Jeder Student spricht zwei Fremdsprachen.*“

Dieser Aufsatz zeigt ferner, dass im Deutschen mehrere Subjektpositionen anzusetzen sind, um kategorische, thetische oder pseudokategorische Aussagen zu bilden: 1) die SpecCP-Position (das Vorfeld), 2) die SpecIP-Position (die erste Position im Mittelfeld) und 3) die SpecVP-Position (für die thetische Aussage):

1) [$_{CP\ Spec}$ Gregors Blick [$_{C'}$[$_{C}$ richtete] sich dann zum Fenster.]] (Kafka, *Die Verwandlung*): kategorisch
2) [$_{CP\ Spec}$ Es [$_{C'}$ [$_{C}$ war] an einem Sonntagvormittag im schönsten Frühjahr.]] (Kafka, *Das Urteil*): thetisch
3) [$_{CP\ Spec}$ Nun [$_{C}$ hatte] [$_{IP}$ aber Georg seit jener Zeit, so wie alles andere, auch sein Geschäft mit größerer Entschlossenheit angepackt.]] (Kafka, *Das Urteil*): kategorisch
4) [$_{CP\ Spec}$ Da [$_{C'}$ [$_{C}$ sind] [$_{IP}$ KÜHE im Garten.]]] (Abraham 2020): thetisch
5) [$_{CP\ Spec}$ Es [$_{C'}$ [$_{C}$ sind] [$_{IP}$ [$_{VP}$ viele Soldaten umgekommen.]]] (Abraham 2020): thetisch (mit einem unakkusativen Verb)

Dieser Aufsatz zeigt vor allem, dass sich im Deutschen in pseudokategorischen Aussagen wie z. B. *„Es gibt gelbe Blumen.*“. eine Diskrepanz zwischen Syntax (Form) und Semantik (Funktion) auftut: Die Kongruenz erfordert das Vorhandensein eines Subjekts, auch wenn es sich semantisch um die Darstellung eines subjektlosen einfachen Urteils in einer thetischen Aussage handelt.